

みおしえ

「蜜蜂は(花の)色香を奪わずに、汁をとって、花から飛び去る。聖者が、村に行くときは、そのようにせよ」(法句經四九中村元訳参照) この法は、仏が、サーヴァッテイ(舎衛城、祇園精舎)に住んでおられたとき、コーシヤ長老とマハーモツガッラーナ(大目連)長老について説かれたものである。

コーシヤ長老は物惜しみをし、他人には草の葉、一滴ほどの油さえ与えようとしなかった。

しかし仏は、かれが妻とともに預流の位すなわち、欲界の人と天の間を最大七回生まれかわれば悟りを開く聖者の境地の近くにあることをご覧になり、マハーモツガッラーナ長老にかれのケチを直すよう命じられた。長老の神通力により、かれらは改心し、預流果を得、大布施を行なった。仏は長老の徳を称え、「比丘たちよ、在家者を導こうとする者は信仰を損ねることなく、富を損ねることもなく、疲れさせず、悩まされず、ちよと蜂が花の蜜を集めるように近づき、仏の徳を知らせるべきです。わが息子モツガッラーナはまさにそのような者です」と言って、この法を示された。これが法句四九の因縁話である。

仏教には、神通(変身)、記心(読心)、教誡という三種の奇跡(神変)が知られる。仏はこのうち、正しい法の説示である「教誡の奇跡」のみを尊重され、他の二は嫌悪すべきものとされた。しかし、ときには神通、読心も許された。それがこのマハーモツガッラーナ長老の場合である。この長老の徳を称えられた仏の言葉は、出家者が在家者を何ら害することなく、恬淡として行すべきことを教えている。「聖者は村にて行ずべし」とは、出家にして有学・無学の牟尼(賢者)は、村では托鉢食を家の順に受け、決して他を損なわず、捉われることなく進むべきであるとの意味である。(ダンマパダ全詩解説 片山一良参照)

心の言葉

人を導こうとする時は疲れさせず、悩まされず、ちよと蜂が花の蜜を集めるように近づき、仏の徳を知らせるべき

お題目で成仏する十三

南無妙法蓮華経唱える事は、マントラを唱える事です。南無妙法蓮華経と唱えるところその音の波動に共鳴し自らの心と肉体が妙法と一体化してゆく。また宇宙意識の高次人格である久遠の釈尊と我々の意識は同調してゆく。ここに唱題成仏の原理があります。小さい声でも良いから、南無妙法蓮華経と唱えましょう。意識の中だけでも良いでしよう。

南無妙法蓮華経のマントラによって我々の意識の母体である妙法に、いつも私たちは帰ることが出来ます。

南無妙法蓮華経のマントラによって我々は全宇宙の万象万物と共鳴します。南無妙法蓮華経によって何か行動するとき作業するときにも南無妙法蓮華経と小声や意識で唱えながらからだを動かしてみましよう。仏の意識が私たちの意識に一つに重なります。

つまり日常生活で行動するときには南無妙法蓮華経と唱えながらいろいろなことをすると、仏の意識が我々の意識を通し仏の仕事をする事になります。仏の大慈悲心と英智によって私たちはこの世を浄土化することが出来るのです。釈尊はこの世から解脱し浄土に生まれる方向で最初道を説いていました。日蓮聖人は、この世から逃れるのではなくこの世自体を解脱させ浄土にしようと思いました。